

## 沖縄県土地家屋調査士会 平成25年度 第2回業務研修会

### 沖縄の印部石（測量図根点）について

金城 善（沖縄県地域史協議会元代表）

#### 目 次

##### はじめに

1. 沖縄県地域史協議会の結成
  2. 「ハル石」との出会い
  3. それまでの市町村史の記述
  4. 各地から「ハル石」発見報告
  5. 地域史の「パル石をめぐる研修会」
  6. 『沖縄大百科事典』に「印部土手」
  7. 「針竿帳」の分析
  8. 『真和志間切針図』の発見
  9. 安里進氏等による「印部石」の研究
  10. 『しまたてい』での連載
  11. 『沖縄の印部石』の発行
  12. 「しまたてい」公開座談会「琉球の測量技術と技師たち」
  13. 『中山伝信録』の「字母」
- おわりに

##### はじめに

2013（平成25）年11月6日（水）から11日（月）まで、沖縄県立武道館アリーナにおいて、琉球新報創刊120年企画「琉球国之図と完全復元伊能図フロア展～全国初の47都道府県の古地図がそろう～」が開催された。連日多くの県民が会場を訪れ、熱心に「琉球国之図」を見学したようである。

この「琉球国之図」は、首里王府が1737年から50年（乾隆2年～15年）にかけて実施した乾隆の大御支配（「乾隆検地」、従来「元文検地」と表記した）、いわゆる間切・島ごとの土地調査事業によって調製され

た「間切島針図」の成果を基に作成された図である。

この乾隆検地の際に、首里王府の御支配奉行は、世界に類のない「印部石」を用いた三角網による針竿測量を実施している。

今回、土地家屋調査士のみなさんが、平成25年度第2回業務研修会を開催するにあたり、この通称「ハル石」、正式には「印部石」について、最初の出会いから今日までの動きについて、お知りになりたいとのことであったので、少しまとめてお話しすることにしたい。

#### 1. 沖縄県地域史協議会の結成

沖縄県地域史協議会（略称：沖地協）は、35年前の1978年（昭和53）11月4日（土）、那覇教育会館において、市町村・団体・機関から45名が参加して結成された。

2013年4月現在の一般会員（地域史編集関係者）は62名で、特別会員（地域史編集機関）37機関である。



1978年11月4日 沖縄県地域史協議会設立大会

沖地協は「地域史編集関係者相互の情報と資料の交換と親睦を図るとともに、史資料の発掘・収集を推進し、市町村史（誌）等の地域史づくりの発展と地域文化の振興に寄与すること」を目的とし、これを達成するため研究会・講演会・研究発表会を開催している。去る5月31日の南風原中央公民館での総会及び研修会までに、総会35回、研修会95回を開催している。

筆者は、早い時期から運営委員や代表を務めさせていただいたことにより、沖縄市での1993年度総会と宮古上野村での研修会を欠席した外は、すべての総会・研修会に参加したが、11月28日から12月2日にかけて、台北で開催される第14回中琉歴史関係国際学術会議（台北大会）に参加するため、11月28日・29日に伊是名村で開催される平成25年度第2回研修会にも欠席せざるを得ない。残念でならない。

## 2. 「ハル石」との出会い

筆者は、1980年（昭和55）3月22日に東村中央公民館で開催された沖地協第2回総会の翌日、帰りがけに名護市史編さん室のある崎山図書館を訪問した際に、今帰仁村や名護市の広報紙で「ハル石」というものが紹介されていることを知った。

今帰仁村では、村教育委員会の松田朝雄氏が、1979（昭和54）年7月1日発行の『広報なきじん』第45号に「村内文化財めぐり⑦上 パルイシ（仮呼称）として、「村内や沖縄本島及びその離島に妙な『印刻版』がかなり発見され」、「この『印刻版』を何とよんでいいか不確定ではあるが」としながらも、聞き取りした結果の「①パルイシ②タテイシ③ドッティイシ④サケイシの4通り」を紹介し、「便宜上仮に『パルイシ』と呼ぶことにする」としている。⑦下では、国頭村・今帰仁村・北中城村・大里

村・具志頭村・浦添市・渡名喜村・伊江村など、かなり広範囲に散在していることから、かなり重要なものであったと思われる」とし、『沖縄一千年史』や『琉球共産村落の研究』に記載された「印部土手」や「いろはを刻んだ長方形の図根」を紹介している。しかしながら、この時点では「パルイシの設置時代について正確な年代は不明であるが、1700年代のことと思われる」としている。



昭和54年7月1日『広報なきじん』第45号

一方、名護市史編さん室では、1979（昭和54）年8月1日発行の『なご市民のひろば』第93号で「パルイシを探しています」として、「昔、地割制の時代に原（ハル）の境などに建てられ、測量の起点（図根）にしたと言われるパルイシ（原石）」についての情報を呼びかけたところ、市民から4カ所のパル石の報告があり、10月の95号で「パル石発見つづく」、12月の97号で「パル石

二つ」、1980年2月の99号で「パル石の新報告」を掲載している。



昭和54年8月1日『なご市民のひろば』第93号

これが私のハル石との出会いである。私は、これらの広報紙をいただいて、糸満市での「ハル石」探しを始めた。

山原では「パル石」と呼ぶが、南部では原はパルではなくハルであるので、「ハル石」ということになった。

### 3. それまでの市町村史の記載

ところで、沖地協が結成される以前の市町村史には、印部石はどのように記述されていたのだろうか。

1970年（昭和45）5月10日発行の『具志川市誌』には、次のように記している。

#### ▲最初の竿入れ地、田場

尚敬王25年（西暦1737年）の土地測量にはこの村からはじめに竿入れ（測量）したとのことである、その当時の図根石（起点石）は本市字赤野の横田英氏が所蔵している。（同氏の言）図根石には「子」の字が刻みこまれている。果たして当時の図根石かどうか歴史家の研究を期待する。

〔『具志川市誌』543頁〕

また、「第四節 江洲按司の墓」のとこ

ろには、「ヲ」の石碑について、次のように記している。

江洲城南西下方には中の嶽と称するところがあつて、ここに尚泰久王の五男江洲王子（童名万樽金）の墓標があり、（中略）この墓標の右隣りに「ヲ」と1字だけ刻記された石碑が建てられている。

〔『具志川市誌』790頁〕

翌1971年9月10日発行の『南風原村史』には、1968年6月10日発行の『沖縄県史21資料編11 旧慣調査資料』に収録された「沖縄県旧慣租税制度」212頁の「竿入帳」から次のように引用している。

竿入帳は享保7年（1722）薩摩の命令に基づき旧藩において元文2年（1737）より全体の丈量に着手し、寛文3年（寛延3年の誤り）に至り完了したときにできたもので、各間切に区分し田畠竿入帳、山野針竿帳、田畠屋敷山野針竿帳、惣方切並に宿道針竿帳、印土手帳等の種類がある。

〔『南風原村史』194頁〕

また、「第二節 南風原間切農業取締法」では、『近世地方経済史料』第九巻の「農業制度の一（農政）」の94頁の「光緒3年丁丑南風原間切惣耕作当日記」等を引用している。この中に「印部土手」についての記述を見ることができる。

一、シルビ土手方切土手や本田畠、山野、川沿宿道の左右、境土手は度々申渡しておいた通り、保護に念を入れるよう下知すること。

〔『南風原村史』264頁〕

1976年4月31日発行の『久米島具志川村史』には、『久米仲里間切諸村公事帳』を

引用したところどころに、「印土手」や「印土手立石」などと見える。

一、蔵の儀、屋敷内に有之候ては火の用心の為不罷成候に付、山野内に作り立て候儀、乾隆十年御免にて、その節印土手并山野境より方角間付記し置かれ候間、(後略)

[『具志川村史』269頁]

一、間切境本地、山野、山方切又は原土手、原名等竿入帳表、惣耕作当克々覚え居り申さずは不叶事に候間、常々心懸相勤むべき事

[『具志川村史』270頁]

一、印土手立石の儀、印の文字彫整え立合させ置候間、時々村役人并耕作当見届させ、若し立石文字并土手相破れ候はば、惣耕作当江申出、在番地頭代差図の上、修甫致すべく候

[『具志川村史』270頁]

1978年9月30日発行の『大宜味村史 資料編』の211頁には、『惣耕作当方控帳』の「惣耕作当勤職帳より写」が翻字され、印部土手並びに名書牌文、又は方切土手について、見ることができる。

一 印部土手並名書牌文又者方切土手之儀、至而大切成御仕置ニ而、少迪も相破候而者御沙汰之程も不輕事候間、間切中印部土手帳表春秋田地御廻見前相改修甫させ、若印部土手石無之候ハバ、地頭代江頭御役衆御案内之上調方可申付 (後略)

[『大宜味村史 資料編』211頁]

『具志川市誌』には、「子」や「ヲ」といった具体的な印部石の所在が記載されているが、その他の市町村史は史料の引用や翻字であり、直接的にハル石に結びつくも

のは少ない。

#### 4. 各地から「ハル石」発見報告

糸満市史でも「ハル石」が2個確認されていることを、同年12月16日の『沖縄タイムス』に、同月22日の『琉球新報』で紹介したら、早速本部町にも「ハル石」があることが、1981年1月13日の『沖縄タイムス』に載った。その後、ここにもあそこにもあるとの報告が相次いた。



昭和55年12月16日『沖縄タイムス』

#### 5. 地域史の「パル石をめぐる研修会」

沖縄県では、「近年、山原を中心に各地でパル石（原石、ドゥリイシ）なるものが相次いで発見、確認されている」ことを受

け、「一度パル石についての学習会を開き、それをふまえて原状がよく保存されているパル石の実地調査を行ってみてはどうか、との話しあいがなされ」、会員に対し学習会への参加と、それぞれの地域のパル石情報の提供を依頼した。

そして、1981年1月27日に「パル石をめぐる研修会」を開催し、古文書に「いろは



地域史協議会ニュース2

之文字を以石ニ彫付」と書かれている「印部土手」との関係や各地での実態について、調査研究を行った。

その年の6月までには、93個のハル石が確認されるに至った。

## 6. 『沖縄大百科事典』に「印部土手」

筆者は、1983（昭和58）年5月30日に沖縄タイムス社から発行された『沖縄大百科事典』に、この時点で理解している「印部土手」についての情報を、次のように執筆した。

**印部土手 シルビグー 王府時代の図根点。**  
シルビグー、ドゥティグーともいう。薩摩は慶長検地で定めた石高を、幾度か増減したのち、さらに1722年（享保7）の大支配のときに自藩同様の支配をおこなう旨検使の派遣を通告してきた。首里王府はこれにたいし、4～5年の延期を願い出たため、薩摩は竿入をおこなわずに居検地で盛増することにした（享保盛増）。その後、1737～50年（乾隆2～15）に王府は印部土手を用いた独自の測量法で両先島を除く沖縄島と周辺離島を検地した

（乾隆大御支配=元文検地）。王府より大里間切へ出された「御支配方仰渡」（『琉球産業制度資料』）には「今後は境界を紛らわしくしないために印を植え、何原何地何番（例えば、おつ原百姓地1番）と付して取扱う（原候文）」とあり、土地は一筆ごとに三角法で測量され、1間切200～300程設置された印部土手を起点とし、正確に記録された。印部土手は田畠印部土手と、田畠と山野の印部土手の2種あるが、その違いはまだ解っていない。土手は直径約6尺（180cm）高さ約3尺（90cm）で、周囲は崩壊を防ぐために根張石で積廻してある。その上には高さ30～75cm、幅13～50cm、厚さ5～15cmの石碑が立てられている。碑の多くはニービヌフニを整形したものであるが、焼物や琉球石灰岩などで造られたものもある。碑には土手の所在原名〈ハルナー〉と順序を示すくい・ろ・は〉が、カタカナかひらがな、または変体がなで大きく彫られている。記号に続けて〈之印〉と彫られたものもある。土手の破損は土地の混乱を招くため、その保護には特に気が配られ、地方役人は年に2度（2・8月）その点検が義務付けられた。廢藩後も村内法によって保護されてきたが、1899～1903年（明治32～36年）の土地整理で、そのほとんどが十字の図根点と取り換えられた。現在では、石碑が100基程確認されるが、土手は数えるほどしか残っていない。



印部土手（左は糸満市、右は本部町）

〔『沖縄大百科事典』中巻465頁〕

## 7. 「針竿帳」の分析

京都大学が所蔵する琉球史料に、『伊平屋島袖山竿入帳（正しくは伊平屋島袖山針竿帳）』がある。これについて、琉球大学農学部の仲間勇栄氏が、南西印刷出版部（ひるぎ社）発行の『地域と文化』第29・30合併号（1985年3月）に、「『伊平屋島袖山竿入帳』について」と題して、分析を試みている。

また、郷土史家の比嘉景宗氏が戦前・戦後を通じて収集した資料の寄贈を受けて、1981（昭和56）年5月26日、東風平町の南部総合福祉センターに財団法人南部振興会による島尻博物館が開館した。その資料の中に『羽地間切田畠村針竿帳』があることがわかり、名護市史によってマイクロフィルムによる撮影が行われ、名護市史編さん室の中村誠司氏らによって「針竿帳」の分析が進められた。

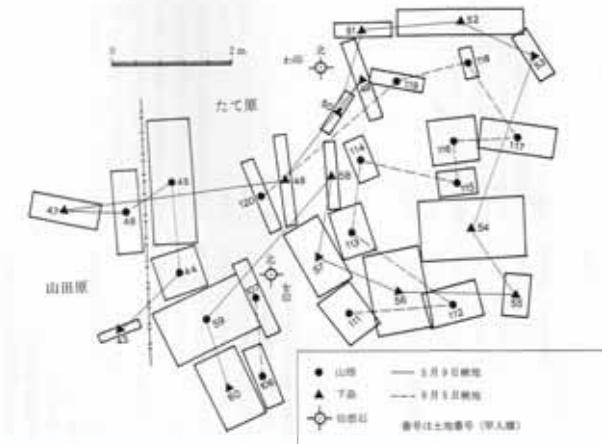
1985（昭和60）年9月12日～14日に、沖縄県立石垣少年自然の家で開催された沖縄県地域史協議会1985年度第2回研修会で、今帰仁村文化財保護委員の仲原弘哲氏は、「羽地間切竿入帳について—実地的検証に向けて—」を報告し、『地域と文化』第33号（1985年10月15日）に、中村誠司氏と二人で「羽地間切竿入帳の分析実地的検討に向けて」を投稿している。



図7 ハル石の分布と配列の想定

ハル石の分布と配列の想定

さらに、浦添市美術館準備室の安里進氏は、同じく京都大学所蔵の『北谷間切桑江村田畠方竿入帳』を分析して、『地域と文化』第55号（1989年8月）に「近世桑江村における稻作の二形態と系譜—『北谷間切桑江村竿入帳』の分析から一」を投稿し、たて原・山田原の耕地竿入順序を図化した際に印部石についても論じている。



たて原・山田原の耕地竿入順序

## 8. 『真和志間切針図』の発見

首里城公園管理センターが収集した「森政三資料」の中に、乾隆大御支配で作成された『真和志間切針図』を撮影した写真（ガラス乾板）の一部があることがわかった。



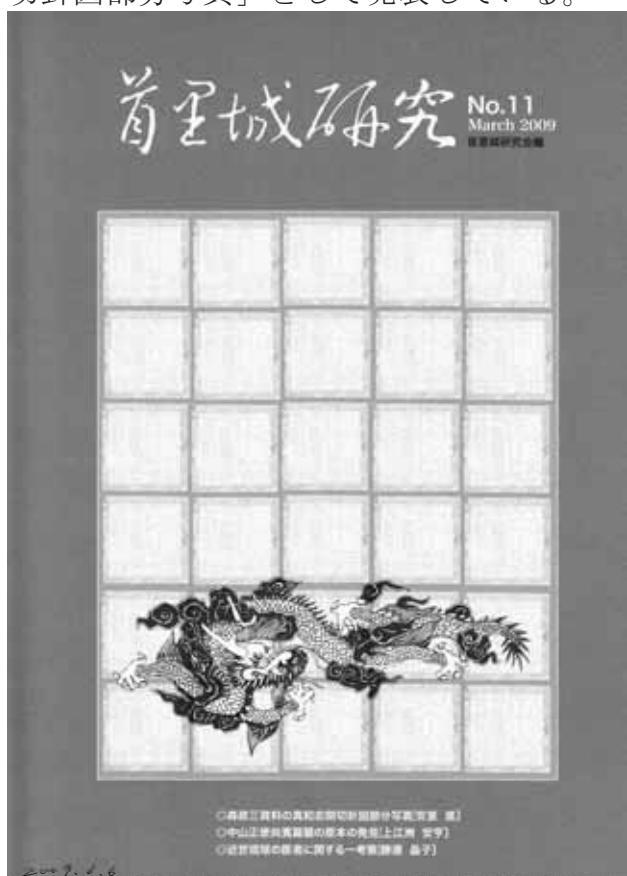
『真和志間切針図』（沖縄美ら島財団所蔵）

沖縄県立芸術大学の安里進教授によれば、写真は『真和志間切針図』の全体の7分の1くらいが写っていて、そこには76個の印部石を見ることがあるという。

## 9. 安里進氏等による「印部石」の研究

この『真和志間切針図』の発見を受けて、2008（平成20）年3月22日の第83回首里城研究会で、安里進氏が「『量地方式集』の測量技術と真和志間切針絵図(森政三資料)について」を発表し、同年5月24日の第84回首里城研究会において、筆者が「乾隆の大御支配における間切針図・竿入帳・針竿帳等について」の報告を行った。

安里進氏は、翌年3月31日発行の『首里城研究』No.11に、「森政三資料の真和志間切針図部分写真」として発表している。



2009年3月31日発行『首里城研究』No.11

また、2008（平成20）年4月25日に沖縄県公文書館で開催された沖縄県地域史協議

会2007年度第3回研修会において、筆者が「大御支配と印部土手石（ハル石）」について、名桜大学の中村誠司教授が「名護市の印部土手石の保存・活用について」を講演し、印部石（ハル石）研究のこれまでの研究の総括を行うとともに、これからの保存・活用について考えた。



中村誠司（左）、金城 善（右）

## 10. 『しまたてい』での連載

社団法人沖縄建設弘済会（現在は一般社団法人沖縄しまたて協会）が発行する建設情報誌『しまたてい』の2008年7月のNo.46から2010年4月のNo.53にかけて、「琉球王国の測量技術と技師たち」が連載された。

安里進氏をはじめ、絵図や測量に関心のある京都大学大学院の伊従勉教授、筆者、沖縄大学法経学部の田里修教授が執筆を担当し、乾隆大御支配の測量技術や針図等の絵図について、これまでの成果をまとめている。内容は次のとおりである。

第1回は安里進氏が「琉球王国の測量技術と技師たち～真和志間切針図の発見～」で、このシリーズの狙いと測量技術者、「真和志間切針図」について、口火を切り、第2回では伊従勉氏が「元文（乾隆）検地以前の測量法と絵図～近年の地図と絵図の発見から見えてきたもの～」で、「首里古地図」と「首里城古絵図」、「首里古地図」の

測量法など、絵図製作事業についてまとめている。

第3回では安里進氏が「『量地方式集』と著者・高原景宅」で、『量地方式集』を基に測量道具、測量の方法等に記している。

安里氏は、この時点ではまだフランス流測量術については、触れていない。

筆者は第4回の「どのようにして間切を測量したか」で、乾隆検地の目的やマニュアル、組織体制、測量の順序、印部土手石の設置について触れ、第5回の「近世琉球を描いた絵地図—琉球国絵図から琉球国之図まで—」で、現在確認できる近世の琉球を描いた絵地図を紹介した。

測量第4回  
琉球王国の測量技術と技術たち④

History 歴史

どのようにして間切を測量したか

金城 善 | 長崎県立歴史博物館  
長崎県立歴史博物館  
長崎県立歴史博物館  
長崎県立歴史博物館

はじめに

1980年3月に東京で開催された沖縄県地域史協議会（略称「沖縄協」）<sup>1)</sup>の第2回総会から発表。名瀬古史編さん室のある那山町吉香町に立ち寄った際は、今帰仁村や名護市の方々で「ハル石」というのが馴染みされていることを知った。

これと同じような石が那覇市にあることを同年12月16日の「沖縄タイムス」で紹介したら、早速本部町にもあることが報じられた<sup>2)</sup>。その後、ここにもあそこにもあるとの報告が相次ぎだ。

写真1 「沖縄タイムス」で報じられた「カネイセイの石」の写真

沖縄では、81年1月27日に「ハル石をめぐる研修会」を開催し、古文書に「いろは之文字を以石ニ鄭材」と書かれていた「印原手手」ととの関係や各地での実態について、調査研究を行った。その年の6月までには93個のハル石が確認されるに至った。

その後、南西印刷出版部（ひるぎ社）発行の

主な参考文献

1) 沖縄県立歴史博物館編「琉球の歴史と文化学習用教材」、1981年1月刊行。  
2) 沖縄県立歴史博物館編「琉球の歴史と文化学習用教材」、1981年1月刊行。

2009年4月 『しまたいで』 No.49

田里修氏は、第6回「蔡温と乾隆（元文）検地(1)」と第7回「蔡温と乾隆（元文）検地(2)」の2回に分けて、羽地大川改修から乾隆検地の実際を、乾隆2年から同9年までについて年ごとにまとめ、野村安察

親子、柳氏田仲親子をはじめ大御支配奉行を務めた人々を紹介している。

最終回の第8回で、安里氏が「検地と測量技術の歴史公園構想」で、現存する印部石を保存活用する方法として、歴史公園構想をまとめている。

## シルビイシ 11. 『沖縄の印部石』の発行

沖縄県地域史協議会では、1980年頃から各機関の協力を得ながら調査を進め、約30年が経過した2009（平成21）年8月19日に、地域史叢書『沖縄の印部石』を編集・発行した。

沖縄県地域史協議会 地域史叢書

沖縄の印部石

しるびいし

4. 編集 228  
地域史のあゆみと印部石（ハル石）研究 金城 善 228  
乾隆（元文）様式と印部石の機能 金城 善 231  
井戸跡地・御園水頭御配口について 田中 修 234  
元文様式の印部石（ハル石）と小字 元原 弘哲 237

5. 索引 241  
6. 刊行までの経緯 245

2009年8月19日発行『沖縄の印部石』

運営委員では、加盟機関をはじめ博物館や資料館などに、各地での印部石の分布やその状態について、調査票に基づく調査を依頼し、各市町村ごとにまとめた。

調査票の項目は、次のとおりである。

### 1. 現況写真（拓本）

2. 現況写真	あるいは「不明」とした。
3. 基礎情報	所蔵・管理は、印部石の所有者あるいは管理者を記した。
建立年	建立場所は、現況が「現存」の場合に、その住所を記載した。
現況	住所は、印部石が保管されている場所の住所を記載した。
残存情況	材質は、印部石がどのような材質の石に刻字されているかを調べ、「微粒砂岩」あるいは「ニービヌフニ」などとし、調査者などが調査したとおりとした。
所蔵・管理	石碑法量は、印部石の高さ×幅×厚さ(あるいは高さ×幅)の順に記載し、単位はセンチメートルで統一した。
建立場所	台座法量は、現地に土手が現存する場合に、その大きさを計測し、記載した。
住所	向きは、土手の立てられている状態で、印部石が向いている方角を記載した。
材質	指定状況は、市町村指定文化財に指定されているかを明記し、建立地が史跡範囲に指定されている場合は、その旨を記した。
石碑法量	建立経緯及び概要は、印部石が建てられた経緯あるいは伝承、印部石の移動や亡失などについて、関係者から聴ける情報をまとめた。
台座法量	4. 建立地に関する情報（現況）は、印部石の建てられている土地利用、土地所有（公有地か私有地の区別）、土地所有者、周辺の土地利用などについて記した。
向き	5. 石碑に関する資料は、拓本資料・文献資料・写真資料について、その有無を記し、これが掲載された報告書や市町村史、字誌などの資料名（書名）を記した。
指定状況	6. 刻字は、「(イロハ…、いろは…の記号文字)と原名」の順に記載し、刻字のイロハ…、いろは…の文字に関しては、徐葆光の『中山伝信録』巻六の「字母」を基にした。摩滅・欠損等で判読できない場合、字数が推測可能なものは□で、不可能なところは…で記した。
建立経緯及び概要	
4. 建立地に関する情報（現況）	
土地利用	
土地所有形態	
土地所有者	
周辺の土地利用	
5. 石碑に関する資料	
拓本の有無と掲載資料名	
文献の有無と掲載資料名	
写真の有無と掲載資料名	
6. 刻字	
7. その他（備考）	
8. 調査年月日・調査者	

調査票の記載にあたっては、次のとおりとした。

3. 基礎情報の建立年は、「元文検地の頃」で統一した。

現況は、建立地（現場）に現存するかという点から、建立地に印部石が現存する場合は「現存」と記載し、印部石の有無にかかわらず建立地に設置されていない場合は「なし」とした。

残存情況は、完全な形である場合は「完形」と記載し、印部石の一部が欠損している場合は「上部損壊」「下部損壊」などとし、印部石が亡失している場合は「亡失」

あるいは「不明」とした。

所蔵・管理は、印部石の所有者あるいは管理者を記した。

建立場所は、現況が「現存」の場合に、その住所を記載した。

住所は、印部石が保管されている場所の住所を記載した。

材質は、印部石がどのような材質の石に刻字されているかを調べ、「微粒砂岩」あるいは「ニービヌフニ」などとし、調査者などが調査したとおりとした。

石碑法量は、印部石の高さ×幅×厚さ(あるいは高さ×幅)の順に記載し、単位はセンチメートルで統一した。

台座法量は、現地に土手が現存する場合に、その大きさを計測し、記載した。

向きは、土手の立てられている状態で、印部石が向いている方角を記載した。

指定状況は、市町村指定文化財に指定されているかを明記し、建立地が史跡範囲に指定されている場合は、その旨を記した。

建立経緯及び概要は、印部石が建てられた経緯あるいは伝承、印部石の移動や亡失などについて、関係者から聴ける情報をまとめた。

4. 建立地に関する情報（現況）は、印部石の建てられている土地利用、土地所有（公有地か私有地の区別）、土地所有者、周辺の土地利用などについて記した。

5. 石碑に関する資料は、拓本資料・文献資料・写真資料について、その有無を記し、これが掲載された報告書や市町村史、字誌などの資料名（書名）を記した。

6. 刻字は、「(イロハ…、いろは…の記号文字)と原名」の順に記載し、刻字のイロハ…、いろは…の文字に関しては、徐葆光の『中山伝信録』巻六の「字母」を基にした。摩滅・欠損等で判読できない場合、字数が推測可能なものは□で、不可能なところは…で記した。

7. その他（備考）は、現地調査の情報、建立地に関する歴史的な経緯などを記した。

8. 調査年月日・調査者は、調査した年月日や調査者がわかる場合に記載した。

『沖縄の印部石』が発行されたこの日には、パレットくもじにおいて、国土交通省国土地理院沖縄支所・沖縄県土地家屋調査士会・（社）沖縄県公共嘱託登記土地家屋調査士協会の共催を得て、沖縄県地域史協議会30周年記念・那覇市歴史博物館企画展シンポジウム「琉球王国の測量技術と遺産～印部石（シリビン）～」が開催され、沖縄県立芸術大学の安里進教授が「印部石から地図製作、そして首里那覇鳥瞰図まで」を、沖縄大学の田里修教授が「元文検地・乾隆大御支配について」を講演している。



左から田名真之・安里進・田里修の各氏

## 12. 「しまたてい」公開座談会「琉球の測量技術と技師たち」

先の『しまたてい』での連載が終了したことを受け、社団法人沖縄建設弘済会では、2010（平成22）年3月26日に沖縄県立博物館・美術館講座室において、「しまたてい」公開座談会「琉球の測量技術と技師たち」を開催した。

執筆者の安里進氏、筆者、田里修氏に、甲南大学文学部の鳴海邦匡准教授が加わ

り、琉球大学の豊見山和行教授をコーディネーターに、次のことが議論された。

①乾隆検地の歴史的背景、②乾隆検地の測量技術と歴史公園構想、③印部石と間切測量の実際、④江戸の測量技術との比較、そして対馬、⑤家譜から読み解く、測量技師たち、⑥廻り検地と測量法、⑦琉球国絵図の作成技術とは、⑧大量に絵図を必要とした時代、⑨薩摩藩の測量技術レベル、⑩対馬との共通性と琉球独自の表現、⑪徹底して細部にこだわった琉球人技師、⑫国家プロジェクト乾隆検地の意義をどう考える、⑬乾隆検地の測量技術を追求することは時代の実相を豊かにする。

地図や測量に関心のある方々が来場し、5人の話に聞き入っていた。

本座談会が開催されるにあって、安里進氏による「『印部石』考—琉球の測量技術と間切針図—」が、『琉球新報』に3月22日から上・中・下の3回にわたって連載された。

2010年(平成22年)3月22日 月曜日 文化 10

印部石

琉球の測量技術と  
間切針図

安里進

伊能忠敬と琉球王国の圖

最先端の方法駆使

測量図根点設置 磁石用い正確に実測

2010年3月22日『琉球新報』

会場では、『しまたてい』No.46～53に連載された「琉球の測量技術と技師たち」を一冊にまとめた「資料集」が配られた。



『しまたてい』公開座談会 資料集

### 13. 『中山伝信録』の「字母」

尚敬王の冊封副使として来琉した徐葆光が、1721（康熙60）年に刊行した『中山伝信録』の巻六には、図に見るような「字母」が収録されている。

石	草	真	草	井	草	井	草	井	草	井
魚	さ	井	け	か	井	フ	川	あ	ト	ハ
九	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ	ヰ
ヒ	き	キ	フ	フ	カ	ノ	チ	チ	チ	ロ
モ	モ	モ	由	由	ニ	ニ	ヨ	ヨ	ヨ	ハ
上	上	上	エ	エ	エ	エ	エ	エ	エ	ハ
世	世	世	メ	メ	メ	江	エ	シ	ク	は
す	す	す	入	入	入	テ	テ	ラ	ラ	ハ
ニ	ニ	ニ	三	三	三	ヤ	ヤ	タ	タ	ヘ
集	集	集	天	天	天	也	也	夕	夕	モ
那	那	那	那	那	那	マ	マ	マ	マ	モ
霸	霸	霸	吉	吉	吉	ア	ア	ア	ア	モ
市	市	市	吉	吉	吉	マ	マ	マ	マ	モ
史	史	史	吉	吉	吉	ラ	ラ	ラ	ラ	モ

徐葆光著『中山伝信録』所収の「字母」

『那霸市史 資料篇第1巻3 冊封使録関係資料(原文編)』173頁

いろは47文字をカタカナを真体で、ひらがなを変体仮名の草書体で表し、中国語の発音を注記している。

印部石に刻まれた文字は、ほぼこの「字母」に記された字体であるが、中には同じ文字であっても違うものもある。

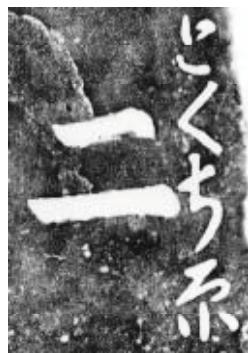
いろは47文字は、順番を示すものであるので、その順番に沿ってひらがなとカタカナを並べてみると、次のとおりである。

1 いイ	2 ろロ	3 はハ	4 にニ	5 ほホ
6 へへ	7 ヒト	8 ちチ	9 りリ	10 ぬヌ
11 るル	12 をヲ	13 わワ	14 かカ	15 よヨ
16 たタ	17 れレ	18 そソ	19 つツ	20 ねネ
21 なナ	22 らラ	23 むム	24 うウ	25 みミ
26 のノ	27 おオ	28 クク	29 やヤ	30 まマ
31 けケ	32 ふフ	33 こコ	34 江エ	35 テ
36 あア	37 さサ	38 きキ	39 ゆユ	40 めメ
41 みミ	42 しシ	43 エエ	44 ひヒ	45 もモ
46 セセ	47 すス			

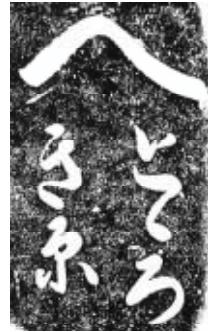
現存する印部石の中から、拓本が取られている文字をサンプルとしていくつか掲載してみる。



3番 は



4番 二



6番 ヘ



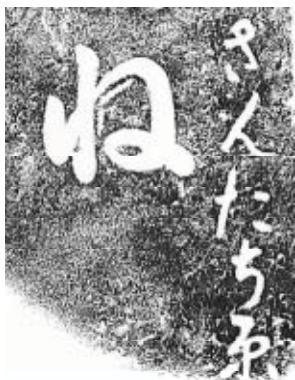
8番 チ



11番 る



15番 ヨ



20番 ね



25番 る



25番 キ



39番 ゆ

## おわりに

以上のように、原に立てられている「ハル石」の発見から始まった印部石研究は、乾隆の大御支配による「竿入帳」「針竿帳」の調査から、「針図」の研究へと進展し、多くの情報が蓄積され、ついには琉球王国の測量技術と技師たちについても、一応の成果を見るに至った。

かつては、近世の各間切島及び村の様子を知ることのできる地図資料としては、沖縄県立図書館東恩納寛惇文庫に所蔵される『薩摩藩調製図』が唯一のものであったと

いっても過言ではない。それが現在では、沖縄県教育委員会が、1983（昭和58）年度から1989（平成元）年度にかけて実施した沖縄県歴史の道調査事業によって、多くの地図情報が整理され、これに続いて1991（平成3）年度から3年計画で実施された『琉球国絵図史料集』編集事業によって東京大学史料編纂所が所蔵する島津家文書の中の正保度『琉球国絵図』をはじめ、国立公文書館所蔵の元禄度や天保度の『琉球国絵図』、宮内庁書陵部所蔵の宝暦度の『琉球国沖縄島并島々絵図』、都城島津家所蔵の『琉球并諸島図』、沖縄県立博物館所蔵の『琉球明細総図』、沖縄県立図書館所蔵の『首里古地図』・『久茂地村屋敷図』、東京大学理学部人類学教室図書室所蔵の『沖縄本島図』などに描かれた文字情報が翻刻されるとともに、地図もカラー印刷され、多くの県民が利用できるようになった。

さらに NPO 法人琉米歴史研究会理事長の喜舎場静夫氏のご尽力により、沖縄戦のさなか米国に持ち去られた『琉球国惣絵図（間切集成図）』が、2001（平成13）年に56年ぶりに返還された。

2006（平成7）年には、尚家第22代当主の尚裕氏から那覇市に「尚家文書」が寄贈され、その中にある『量地方式集』が公開され、測量技術の研究が促進された。

今回「伊能図」とともに『琉球国之図』が公開されたことで、地図や土地制度、測量技術に関心のある方だけではなく、多くの県民の方々が、近世の村々に生きた人々・先祖の息づかいを感じることができたのではないかと思う。

今後は、この『琉球国之図』や『琉球国惣絵図（間切集成図）』が刊行され、いつでもどこでも冊子を広げて、地図談義ができるることを望むものである。

長時間、ご静聴ありがとうございました。